

大聖寺あらは金昌寺とある。
 おのあ日あまゆて
 よりすきをれぬばやし
 とのこす一やのはよそす④
 おも身をすて衆寮^{うじょう}と
 のがのへぢうへん座りもむ
 鐘板^{なべ}もて食堂^{じきどう}に入
 せは越前の國、よもろふ席^{せき}で
 かく施^せやの御^ごえで
 とくらややして草鞋^{くわい}おもづ
 た揚^{あひ}て出^だゆかきみだゆ
 〔金〕

大聖寺の城外、金昌寺と云寺に
 とまる。猶加賀の地なり。曾良も
 前の夜此寺に泊りて、裏
 よもすから秋風聞やうらの山
 とのこす。一夜の隔千里に同じ。
 吾も秋風を聞いて衆寮に臥は、
 明ほの、空ちかう、読経声すむま、
 に、鐘板鳴て食堂に入。
 けふハ越前の國へと、こゝろ早卒にして
 堂下に下るを、若き憎とも
 紙硯をかゝえ、階のもとまで追来る。
 折ふし庭中の柳ちはれは、
 庭掃て出るや寺に散柳^{ちよ}かさす
 とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。



越前^{〔境〕}に、吉崎の入江を舟に
 桨^さして、しほこしのまつを尋ぬ。
 よもすから嵐に波をはこせて
 月をたれたる汐^{しお}こしの松^{まつ}
 にまつりくよのね

九岡天龍寺の長老、古き
 因あれは尋ぬ。又金沢の北枝
 といふもの、かりそめに見送りて、
 此ところまでしたひ来る。所々の
 風景過さずおもひつゝけて、
 折ふしあへれる作意など聞ゆ。
 既別^{まことに}にのそみて、
 物書^{あらわし}て扇引^{あひ}さくなこりかな
 五十丁山に入て永平寺を礼す。
 道元禪師の御寺也。邦畿千里
 を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、
 尊きゆへ有とかや。

福井ハ三里とも少しと夕飯
 とてうきり生ひたるの旅宿と
 いふ等栽と云ふ。宿主が
 うれしくりればえす事うてあ
 ること。十日ばかりゆき、まわびて
 みやもんに見るにやくふたつは
 あんてやくもを下りてシンドル
 ネキひそゝみに入つて、宿の宿
 ソドをまのとえりて、難み
 とてお、おえをまかうす。おほ
 えもよつこり門をたどりて、傳き
 ある女のとて、うくまわづくか。
 うての御坊よやまし、半あくね
 うのうきよくて、夜は、さる。
 おうのうきよくて、夜は、さる。

等
 な
 口
 溢
 あ
 る
 お
 う
 き
 ぐ
 さ

福井ハ三里ばかりなれば、夕飯
 した、めて出るに、たそかの路たとく
 し。こゝに等栽と云古き隠士有。
 いつれのとしにか、江戸に来りて予を尋。
 はるか十とせ餘り也。いかに老さらほひて
 有にや、はた死けるにやと、人につね
 侍はれ、いた存命して、そこくとおしゆ。
 市中ひそかに引て、あやしの小家に、
 夕かほ・へちまのはえかりて、鶏頭・
 は、木々に戸ほそをかくす。さて此
 うちにこそと門をたけは、佗しけ
 なる女の出て、「いつくよりわたり給ふ
 道心の御坊にや。あるしハ此あたり
 何かしと云物のかたに行ぬ。もし用あらは
 尋給へ」といふ。かれか妻なるへしと
 しらる。むかしものかたりにこそかゝる
 風情ハ侍れと、やかて尋あひて、その家に
 二夜とまりて、名月ハつるかの
 みなとにとたひたつ。



2) 玉江の宿泊地は、白根山の北側に位置する。3) 航行の際、船の鳴き声が聞こえた。4) 朝日が昇る山あり。5) 朝霞が現れる山あり。

4) 我が思ひてよしむが、越後はかへるの心は感はざまし(語みんをす) 5) 朝霞(あさか)の宿泊地は、白根山の北側に位置する。6) 朝日が昇る山あり。7) 朝霞が現れる山あり。

玉江のあし、穂に出にけり。
うくひすの関を過て、湯尾峠

(古今和歌集) 50

破産行舟をすやまとすらせ
僅あらと舟あらのとて近見時の
刀をもとめ渡りとつねる波士のあら
もとめくも事あらにあらとのみ
ゆきを事あらにあらとのみ

ゆきを事あらにあらとのみ
ゆきを事あらにあらとのみ
ゆきを事あらにあらとのみ

浪のるやが見みやる秋の空

其日のあらやー等教すせ事
あらのす

駆通をみすすて生じふく
みのまとせひぬすとそられず
大地の庄す入も留うむ、せよ無

事す、食越すもととせ
せ行ふかみ入集る前川す荆ひえす

更外モドロイー・日やとくして
茂生のすみすとと「且もす、ひ

且もハヨホのす、まやまか
2長日よすれど伊勢の住宮

お、りとみ舟すつづく

船のすみはり秋を

雨降
十五日 亭主のことをたかへす

名はくの酒をあらまし、等教に筆をとらせて

ひろそと種のことをたかへす

等教もともに送らんと、裾おかしう

からけて、路の枝折とうかれた。

漸白根か嶽かくれて、比那か嵩

あらはる。あさむつのはしをわたりて、

橋はさむづの橋へ林草る

帰山
氣比神宮
明神に夜参す。仲哀天皇の
御廟也。社頭神さひて、松の木の間
に月のもり入たる、おまへの白砂。
猶明夜の陰晴はかりかたし」と、
月ことに晴たり。「あすの夜もかく
つるかの津に宿を求む。その夜、

有へきにや」といへは、「越路のならひ、
荷ひ、泥濘をかへかせて、参詣

遊行二世の上人、大願發起の事
有て、みつから草を刈、土石を
霜をしけるかことし。「往昔、

遊行の砂持と申侍る」と、亭主のかたりける。

神前に真砂を荷ひ給ふ。これを
往来の煩らひなし。古例今にたへす、

十五日、亭主のことはにたかへす、雨降。

名月や北国日和さためなき
十六日、空はれたれば、ますほの小貝

ひろはんと、種のはまに舟を走す。

海上七里あり。天屋何かしといふもの、
破籠・小竹筒など、こまやかにした、めさせ、

僕あまた舟にとりのせて、追風時
まに着ぬ。浜ハはつかなる海士の小家にて、

わひしき法華寺有。こゝに茶をのミ、
酒をあた、めて、夕くれのさひしさ感に堪たり。

寺にのこす。

路通も此みなとまで出むかひて、
其日のあらまし、等教に筆をとらせて

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

浪の間や小貝にましる萩の塵

大垣の庄に入は、曾良もいせより
來り合、越人も馬をとはせて、

如行か家に入集る。前川子・荊口父子
其外したしき人々、日夜とふらひて、
蘇生のものにあふかことく、且よろこひ
且いたる。旅のものうさいまたやまさる
に、長月六日なれば、伊勢の迂宮
おかまんと、又舟にのりて、
蛤のふたみにわかれ行秋そ



石奥細道上下二巻應
椎駒子之寫寫於洛下
夜半亭開寫

平寺坐水と庚午年月

六十一年正月

太陽暦十月十八日

PSO まきいふみ便紙に一

氣比の海のけさにあで、いろの浜の色にゆりて
ますほめ小貝とよみ侍りしは西上人のモ見成け
らし。されば竹の小ぼらは裏きとの名を伝へてシの
まるをアギリ。風雅の人いとほぐすむ。下官年
比思ひ渡りしに此だび武江芭蕉松葉巡園の
序しきほにまうご侍る。同じ舟にまつて
小貝を拾ひ袴につみ盆にうち入ぬなどして
徳とんのむかしをこはやす事になむ。越前
ふくみ洞哉事。小教ちゆすすほの小貝小盆。

和書元禄ニ仲秋

1) 内に風合せんとせさせ給ひける人にかはりて
シ沐むるまほの小貝ひろふとて田の浜とや
ハふにやあるらむ

西行

不くろ細道と見る
おえん書木下りて
おはなと木下りて
おれぞ

呉春識

于時安永己亥翁冬燕村
半亭閑窓卷応
夜維駒奥細道
右奥もと細道
子と細道
之需
上卷
下卷
下卷
写レ於二
洛く下
卷応

寛政丙辰初冬

おくの細道を覚束
ながらす書おほせたるハ
夜半翁をおきて それ
たれならむ

寛政丙辰初冬

逸翁美術館藏

燕村筆維駒本(上・下巻)

2) 西行之源

31

泉涌は箱根
湯本 ひ

田は有明にて先をさされる物から景さ
やかに風景でなかなかをかいき囲たり

省當審之
杜甫湖南
首相江以舟
之中之委人

廿四日、方代より歸りてしと細
又並てお駕舟の人に生徒でいふる
にさしておもせすの日、船にて
航と相手古ててあへ候まであまむ
じの手とおれはやくもよき雪油
ありのわす海流をすこすこお車坐
孤尾を候入大原町にておこせん
東三日霞ヶ浦を西川入園にてうるお
ひみす坐ておどりせびほろと音すお
ひく風の音すむらさきやまをく美義
徳せり三里を次するお京山の月夜を今
うりて住みし水邊の林へお壁を
まろも住むれに難うる

1) 夫天帝萬物の生母也、光陰者百代の過客也、而渾生如夢

蓮旅館

李白·春夜宴桃李園序

四時四時を
遡向の向は3ベレ
レとあ3。

文選古詩
王漁穀懷可山
日暮風雨雲
枯魚過酒缸
何時還復入
古樂府

4
藝能文庫
第一回
「奥細道」
著者　安永七年八月刊

行春や鳥啼魚の目ハ泪

幻のちまたに離別のなみたをそく。

千佳

あきこ 草の戸も住替る代や雛の家
あきこ 面八句を庵の柱にかけ置。やよひも未

取ものとの手につかす。も、引のやぶれをつゝり、
笠の緒付かへて三里に灸すゆるより、
松しまの月先心にかかりて、住るかた八人に譲り
杉風か別墅にうつるに、ゆず

又旅人なり。舟のうへに生涯をうかへ、馬の
口とらえて老をむかふるものハ、日々旅にして
旅を栖^{すみ}とす。古人^レも多く旅に死せるあり。

